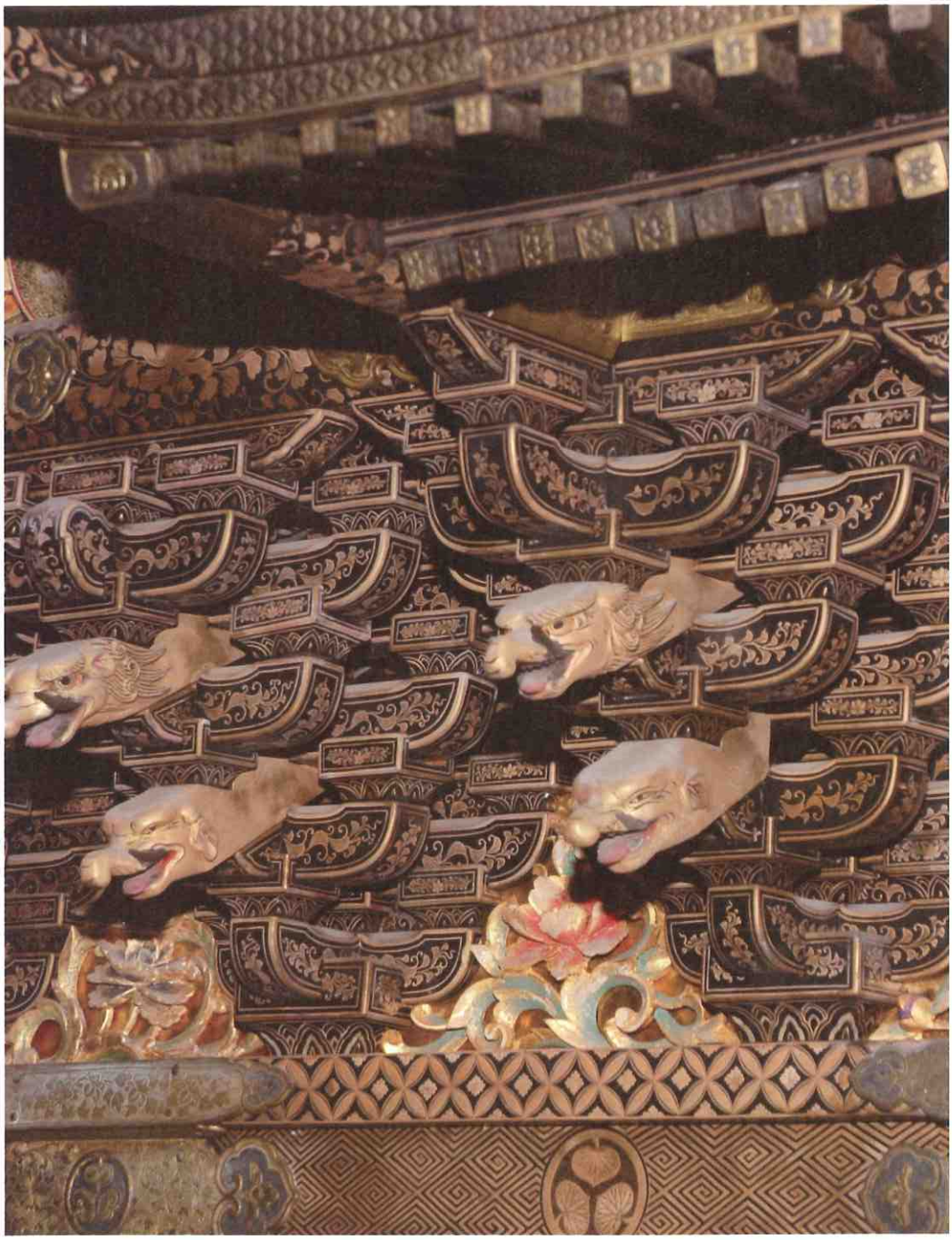
霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第116号
平成27年10月1日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp



重文徳川家霊台内部の霊屋の上部組物　特別公開は10月31日(土)から11月8日(日)まで（関連記事は11頁）

利用案内

開館時間
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分
■休館日　年末年始のみ

■拝観料　大人　600円
高・大学生　350円
小・中学生　250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり

第116号　目次

秋期企画展のご案内……2～3
収蔵品の紹介90……4
高野山の古建築 第二十回……5
高野山の考古学（八）……6～7
賢瓶に納入されている五薬と鬼との関係（その二）……8～9
高野山の文書（六）……10
高野山霊宝館からのご案内……11
霊宝館の庭園……12

秋期企画展
「宝寿院の名宝」
平成27年10月3日（土）～
平成28年1月11日（月・祝）

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！　ホームページ割引券もご利用ください

平成27年度秋期企画展

宥快・長覚没後六百年記念「宝寿院の名宝」

期間　平成27年10月3日(土)～平成28年1月11日(月)・(祝)

※但し、平成27年12月28日(月)～平成28年1月4日(月)は休館とさせていただきます。（期間中、一部展示替を行います。）

前期　平成27年10月3日(土)～11月23日(月)・(祝)

後期　平成27年11月25日(水)～平成28年1月11日(月)・(祝)

宥快法印像（宝寿院）

重文　地蔵菩薩像（宝寿院）

長覚法印像（宝寿院）

華鬘（宝寿院）

平成二十七年（二〇一五）は、宥快・長覚両先徳が亡くなられて、ちょうど六百年目になります。宥快・長覚は、室町時代に高野山教学の興隆に尽力し、その興隆は、のちに「応永の大成」と呼ばれるほどでした。宝性院院主であった宥快の学派は宝門、無量寿院院主であった長覚の学派は寿門と呼ばれ、当時の高野山の教学を二分する勢力でした。その後も塔頭寺院筆頭格として江戸時代まで続き、大正時代になり両院は合併し、宝寿院となりました。

宝寿院には、宥快・長覚両先徳の遺品も含めて、宝性院、無量寿院に所蔵されていた名品の数々が、今もなお伝わっています。そこで、両先徳没後六百年を記念して、「宝寿院の名宝」と題し、宝寿院に伝わる文化財を紹介します。

主な展示品

彫刻

宥快法印像	宝寿院
長覚法印像	宝寿院

絵画

重文	地蔵菩薩像	宝寿院（前期）
重文	文殊菩薩像	宝寿院（前期）
重文	尊勝曼荼羅図	宝寿院（後期）
重文	六字尊像	宝寿院（後期）

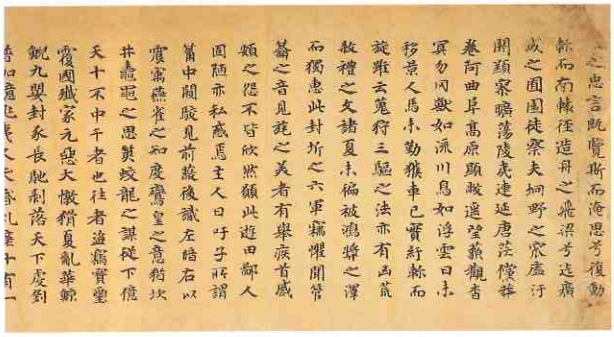
県指定　金剛薩埵像（宝寿院）

重文　六字尊像（宝寿院）

重文　尊勝曼荼羅図（宝寿院）

重文　文殊菩薩像（宝寿院）

重文　金銅三鈷杵［伝・覚鑁所持］（宝寿院）



国宝　文館詞林残巻（宝寿院）

県指定　瓜・筍図　宝寿院

県指定　金剛薩埵像　宝寿院（後期）

弘法大師像

釈迦如来・普賢・文殊菩薩像（狩野探幽筆）　宝寿院

不動明王二童子像　宝寿院

薬師三尊像　宝寿院

楊柳観音菩薩像　宝寿院

道範大徳像　宝寿院

大師行状記巻　宝寿院

宥快法印像　宝寿院（前期）

長覚法印像　宝寿院（前期）

書跡

国宝　又続宝簡集67（御影堂大師御影修復記録）　金剛峯寺（前期）

国宝　又続宝簡集101（会衆利銭借券）　金剛峯寺（後期）

国宝　又続宝簡集73（三所十聴衆評定事書案）　金剛峯寺（前期）

国宝　宝簡集36（春日局消息案）　金剛峯寺（後期）

国宝　文館詞林残巻　宝寿院（前期）

重文　決定往生集　宝寿院（前期）

重文　日本法華験記上　宝寿院（後期）

重文　往生瑞応伝　宝寿院（後期）

宥快筆　我今勧請阿闍梨　宝寿院

宥快筆　曩莫大師明神　宝寿院

万里小路宣房書状　宝寿院

起世経巻第三　宝寿院（後期）

工芸

重文　金銅三鈷杵（伝・覚鑁所持）　宝寿院

金剛盤　宝寿院

五鈷杵　宝寿院

華鬘　宝寿院

※期間中、展示替えを行います。

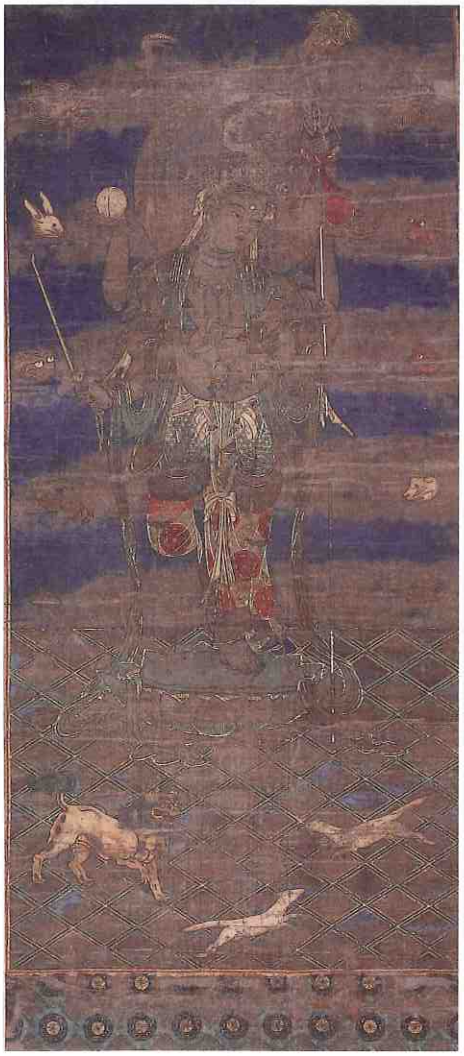
※文化財の保存上、展示品が変わる場合があります。

収蔵品の紹介 90

重要文化財　六字尊像　一幅

鎌倉時代（14世紀）　宝寿院蔵

絹本著色　縦78.2cm　横34.0cm



参考　十巻抄（円通寺蔵、重文）より妙見菩薩

六字尊というほとけの名前も姿も、ご存じの方は少ないかと思います。六字尊は六字天・六字明王という別名があり、体が青黒いことから黒六字とも呼ばれます。六字神呪経や請観音経をもとに行われる六字経法は、調伏（怨敵や悪鬼を懲らしめること）や息災（心身の健康）を祈る修法です。平安時代末～鎌倉時代初期に編纂された図像集である『十巻抄』や『別尊雑記』などによると、六字経法の本尊は数種類あり、①一字金輪を中心に六観音を描く画像、②聖観音の種子（梵字）を中心とした曼荼羅、③五大明王、④六頭六手足の焔曼徳迦明王（大威徳明王）、そして⑤本像のような六字尊が挙げられています。特に調伏を祈る際には六字尊を祀ったようです。

本像は右足を曲げて蓮華上に片足で立つ、通形の六字尊像で、画面の傷みで分かりにくいですが頭上に蛇を戴き、六本ある腕のうち二手は印を結び、他の手はそれぞれ日（赤）、月（白）、戟（槍）、刀を持ちます。「六字明王」という別名がありますが、不動明王のような怒りの表情ではなく、菩薩のように穏やかな顔は孔雀明王をイメージさせます。またその周囲の空中には十二支の頭部のみが描かれ、足下には獅子と二匹の白狐が配されています。他の図像では獅子ではなく犬が描かれるのが一般的で、また日と月の配置が左右逆である点が本像の特徴といえます。この、六字尊の像容についてですが、平安時代の院政期の頃に考え出されたとみられ、前記の『十巻抄』や『別尊雑記』によると比叡山前唐院に六字尊を中尊とする曼荼羅があったといい、本像のような六字尊像が描かれていたようです（ただし詳細は不明）。また白河上皇（一〇五三～一一二九年）が建立した法勝寺（京都、現在は廃寺）にはかつて丈六（普通は約四・八mですが仏像彫刻では約二・四mを指します）の六字尊像があったといいます。それ以前より信仰されている、北極星を神格化した妙見菩薩（天台密教では尊星王と呼ばれます）は右足を曲げて立ち、日・月を持つなど共通点が多く、六字尊成立に影響を与えているとみられます。

調伏という修法の目的から考えて、あまり人目に触れたり流布する機会が無かったのか、こういった記録や図像集に記される以外に、六字尊画像は現存例が非常に少なく、彩色画像は特に珍しいため、鎌倉時代後期に制作されたとみられる本像はたいへん貴重な遺品であるといえます。

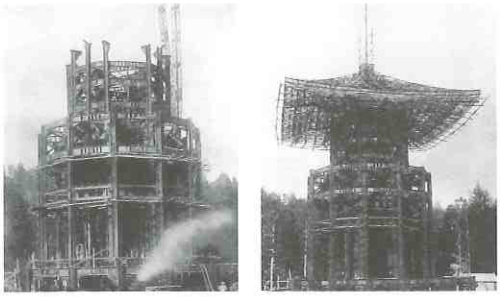
（福形）

連載

高野山の古建築

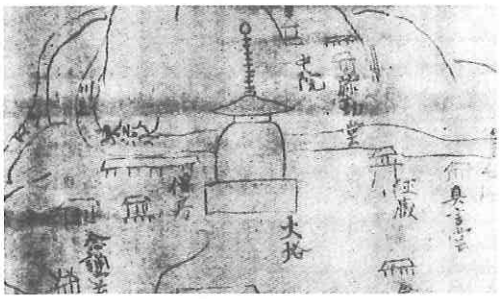
第二十回　金剛峯寺壇上伽藍根本大塔

鳴海祥博



昭和12年に再建された大塔の工事中の様子　現在の大塔は内外部とも見える部分は木造だが、構造の中心部分は鉄骨造となっている。当時の近代建築学の成果を取り入れ、構造強度の確保を目指した。

昭和12年に再建された現在の大塔　大規模な建築で、相輪の頂部まで「十六丈」（48.5m）ある。1200年前に創建された大塔の規模が忠実に伝えられていると考えられている。



壇上伽藍の古図１　高野山が開創された頃の様子を描いた図が何種類か金剛峯寺に残されている。その一つには大塔が1重の「宝塔」の姿で描かれている。昭和の再建工事中の骨組みの鉄骨造の姿と似ているのが興味深い。

壇上伽藍の古図２　別な古図の大塔は、現在の大塔と同じように屋根が２段に描かれている。上下で屋根の描き方が異なっていて、古図１の「宝塔」の下方に差し掛けの屋根を継ぎ足した様子が窺われる。

今回は高野山の中心、壇上伽藍にある「根本大塔」を紹介します。この塔はその名の通り高野山真言宗の「根本」となる建物で、全宇宙の中心となる仏「大日如来」を表す、とされています。

大塔は一千二百年前、お大師さまが高野山を開いたときに建設が計画され、弘仁十年（八一九）に塔の心柱を壇上に曳き出した、と記録にあります。その十五年後、承和元年（八三四）にお大師さまは仏塔建立の浄財を勧進する文をしたためています。それがいつ完成したかは分かりませんが、その二十八年後にもまだ工事は続いていたようです。心柱を切り出してから四十年以上経過しています。大変な難事業だったと思います。

この創建の大塔は承暦五年（九九四）に落雷のために焼失します。そして再建されますが再び落雷で炎上。その後も火災と再建を繰り返し、現在の大塔は六代目の建物です。

創建の大塔は建設に四十年以上を要したようですが、再建もなかなか大変だったようです。二代目の大塔は再建までに百九年、四代目の大塔は七十六年、六代目の現在の大塔は、江戸時代後期の天保十四年（一八四三）の火災から九十四年後の昭和十二年にようやく再建されました。

お大師さまの構想した大塔は高さ「十六丈」と伝えられています。これは昔の長さの単位ですが、十六丈は百六十尺、四十八・五mです。仏様の身の丈は「一丈六尺」とされているので、その十倍の寸法で計画されたと考えられます。現在の大塔の高さは屋根の上に聳える「相輪」という輪を重ねたような飾りの頂部まで四十八・五mあります。

つまり、現在の大塔の大きさは、一千二百年前に創建された規模を受け継いでいると考えられます。そう思うとその大きさに改めて驚かされます。しかもそれが木造建築なのです。

昭和再建の現在の塔は、実は骨組みが鉄骨造で、その外側に、木材で造った建築部材を貼り付け、木造建築に見せかけるという、それまで例のなかった構造の建物です。これだけ大きな大塔をすべて木造で建築しようとすれば、大量の巨木の入手や構造強度の確保など難題山積だったので、当時の近代建築工学の成果を積極的に取り入れたのです。

ところで、大塔は屋根が二段に重なっているので、「二重塔」のようにも見えますが、建物の成り立ちを歴史的に考えると、本来は円筒形の胴体の上に四角な屋根を載せた「宝塔」という一重の建物です。次にその胴体の部分に雨よけの庇を差し掛けた姿が、現在の形と考えられます。そのような成り立ちを思わせる大塔を描いた古い絵図が残されています。上の挿図を見て下さい。

大塔は、円筒形の胴体という、それまでの日本には無かった建物です。何故このようなものが考えられたのか、興味のあるところです。次回そのことを考えてみましょう。

高野山の考古学（八）

納骨信仰の展開⑥

公益財団法人 元興寺文化財研究所
狭川 真一

石塔内部の納骨は下火となり、遺骨の埋納場所と石塔造立箇所が異なるようになってくるだろうとの推測を、前回までに解説しました。概ね室町時代頃の話ですが、この頃に主体をなしていたのは、四石を組み合わせた小型で一般的な五輪塔です。これが室町時代の後期になると、さらに小型化、量産化が進み、その流れのなかで、一石五輪塔と呼ばれるコンパクトな石塔が登場します。一つの石から五輪塔を彫り出すことは、技法的には平安時代から存在しますが、室町時代に出現する小型で量産されたものに限って、一石五輪塔の名称を用いるのが一般的ですので、ここでもそれにしたがっておきます。その大きさは写真にみるように、まさに手荷物サイズなのです。

一人が抱えられるサイズの一石五輪塔

一石五輪塔の出現

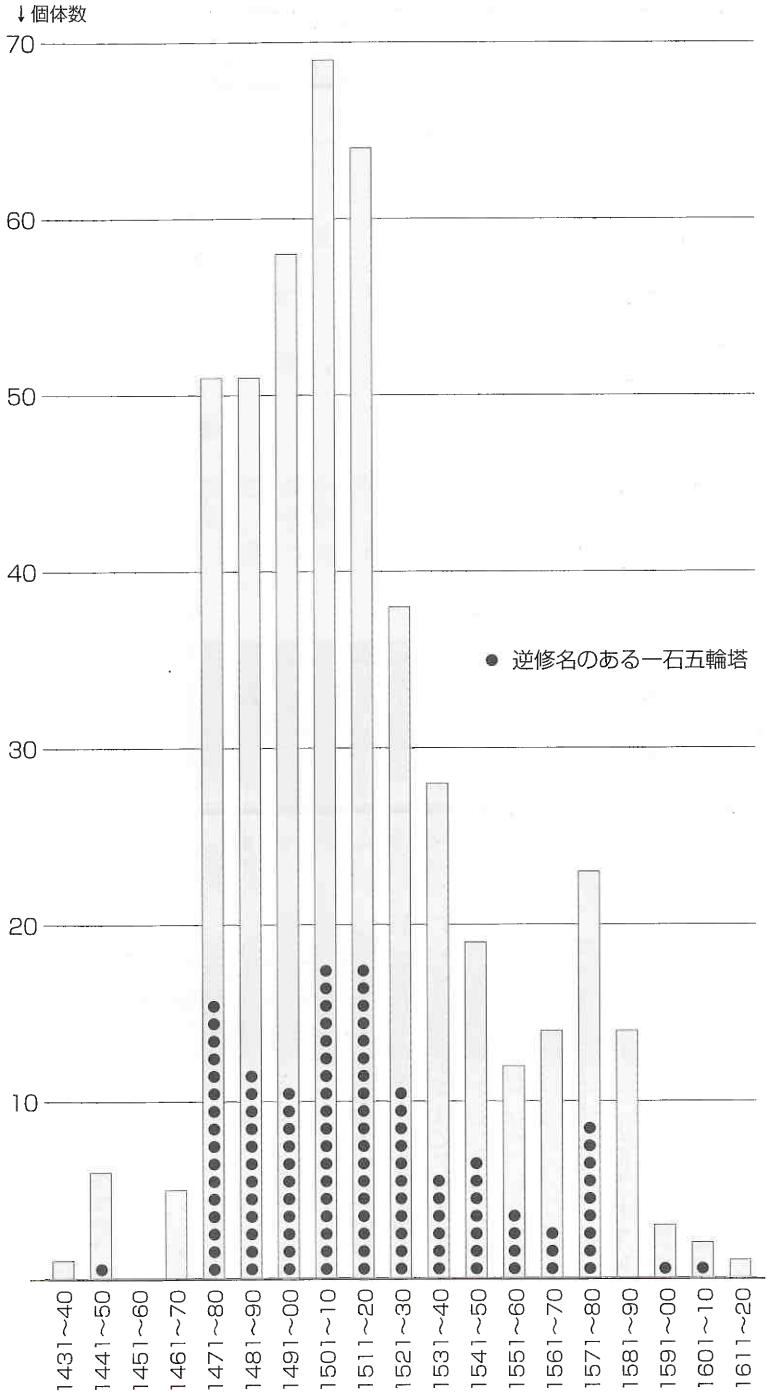
最古の一石五輪塔とされるものは、貝塚市半田墓地にある応永六年（一三九九）の塔で、その形は通常の五輪塔とあまり変わらない姿です。高野山ではこれより少し遅れて登場し、木下浩良さんの報告によりますと、現在確認されている最古の資料は永享十一年（一四三九）の銘があるもので、形態も底部が尖っていて土中に突き刺す形になっています。この形の問題は別の機会に述べることにして、ここでは数量分布とその用途についてみていきます。

一石五輪塔の数と用途

グラフを一つ用意しました。これは高野山の一石五輪塔が、出現してから消滅するまでの様子を十年単位で棒グラフに表現したもので、グラフの高さはその十年のうちに造立された石塔の数を表しています。これは、現在確認されている年号を刻む塔に限定された数量です。実際には無銘のものが多数存在しますので、当初に造営された数はもっと大きなものになるでしょう。しかし、これでも十分にその実態を表していると考えています。

グラフが示すピークは、一五〇一年～一五一〇年のところにありますが、その前後の年代も類似した数量の石塔が造営されていますので、一四七一年～一五二〇年の約五十年間が高野山における一石五輪塔全盛期といえます。以後、徐々に数を減じて、一七世紀前半には見られなくなるようです。

さて、このグラフにはもう一つの



高野山内における一石五輪塔変遷表
（『紀伊国金石文集成』『同－続編－』を参考に作成）

一石五輪塔の数が増大することや逆修の供養が盛んになることと、納骨堂という専用のお堂が登場することには深い関係があるとみています。

記録では、今の位置に納骨堂が確認されるのは、文禄五年（一五九六）に焼失したという記録（『紀伊続風土記』）ですので、遅くともその時には存在していたと読み取ることができます。また、納骨堂のようになっていた拝殿が灯篭堂として表現されるようになるのは、大永四年（一五二四）の『実隆公記』からですので、一六世紀前半頃には拝殿への納骨は停止していたと思われます。

これらの流れを整理しますと、石塔造立の増加、逆修供養の増加に対応して、納骨専用の空間も整備されてゆき、現在の納骨堂へと発展していったと考えられます。

【参考文献】
木下浩良　一九八五「高野山最古の在銘一石五輪塔」『史迹と美術』第五五七号
狭川真一　二〇一四「高野山奥之院の納骨信仰」『考古学雑誌』第九八巻第二号

要素を示しています。棒グラフに重ねて●印を付けていますが、これは「逆修」（生前に自己の供養を行って造立した）塔の数です。多少のばらつきはありますが、概ね三〇％程度は逆修塔として造営されたことがわかります。つまり遺骨とは無関係に、生前に供養が行われ、奥之院に安置されたことになります。

ここからは推測ですが、奥之院の各所に何万基も安置される一石五輪塔。逆修の場合、石塔は生前に奥之院へ運ばれたでしょうし、それは供養者本人が持参したと思われます。もちろん家族同伴だったかも知れませんが、造塔の何年後に死亡するかは分かりませんし、長い間元気に過ごされたとすれば、生前に安置した場所へ遺族が確実に辿り着けるのでしょうか。広い奥之院に無数の一石五輪塔がある風景を想う時、それはまず不可能なことだろうと思うのです。石塔と遺骨は上下の関係にあったと思いがちですが、必ずしもそうではなかったことが推測されるのです。それでは遺骨はどうなるのでしょうか。

納骨堂の登場

現在、御廟前の少し西寄りに納骨堂があります。位牌等の供養とは別に、遺骨はここに奉納されます。一石五輪塔には遺骨を奉納する穴が穿たれていませんし、発掘調査で当初の姿を留めて発見された事例もありません。また、前回にも紹介しましたとおり、地下の遺構は一石五輪塔の数ほど発見されていません。私は、

賢瓶に納入されている五薬と鬼との関係（その2）

富山大学和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館
伏見 裕利

前回、『覚禅鈔』の地鎮鎮壇法には、地鎮法で用いる賢瓶の中には五薬を用いること、五薬とは赤箭（現在は天麻の名称で流通している）、人参、石菖蒲、茯苓、牛黄の各生薬であることを述べた。そして金剛三昧院客殿の発掘調査で出土した賢瓶中からは、オニノヤガラ（赤箭の原植物）の鱗片葉が見つかったこと、さらに本草書の記載から「鬼」の存在を意識していること、そして賢瓶の中に封じ込めた鬼を、改心させる目的で五薬を使用している可能性を述べた。

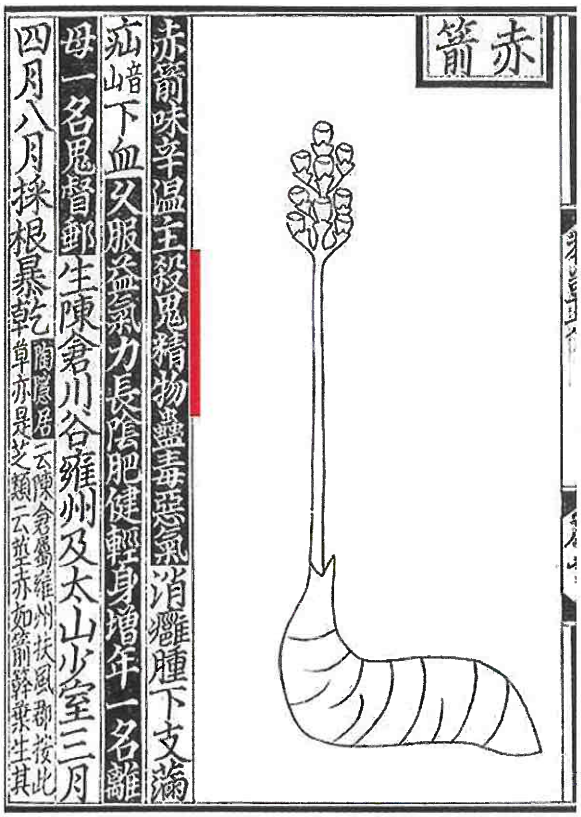


図1　『経史証類大観本草』における赤箭の記載（一部を抜粋）

賢瓶中に見つかったオニノヤガラの鱗片葉は細長く刻まれていた。これはオニノヤガラを矢に見立てたとき、地上部の茎に数個存在している鱗片葉は、翼の役目をする。この部分を細長く刻むことにより、仮に矢が命中しても、急所を外れて、鬼の生命を奪うことなく、鬼の精なる物だけを殺す、つまり鬼としての一面を殺すだけにとどまり、改心する命と心を残そうとしていたのではないかと推察した。

『経史証類大観本草』における赤箭（天麻）に関する記載を図1に示す。ここで黒地に白文字の文章が『神農本草経』の文章である。すなわち「赤箭の味が辛、性が温。鬼の精なる物を殺し、蠱毒、悪気を主る。久しく服すれば…」と記されている。ここで赤箭は「鬼の精なる物だけを殺す」役目を担っている。したがって実際に鬼を殺してはいない。なお右には図経本草における附図が記されている。

つづいて五薬の生薬名、出典と本草書の記載、基源について表1にまとめ、各生薬が持つ役割を明らかにした。これにより五薬には賢瓶中に納入する順番が存在していたものと考えられた。最初に、牛黄を入れることにより、「邪を除き、鬼を逐う」ことを目的として、先ず鬼を疲れさせる。二番目には、石菖蒲を用いて「鬼の気を下す」ことを目的とする。三番目には、天麻を用いて「鬼の精なる物を殺す」。さらに四番目として、先の牛黄、石菖蒲、天麻が十分効果を発揮していない場合に、賢瓶から鬼が逃げ出せないように、人参を用いて「鬼の蓋」をしていた。ここで各生薬の薬効のため、鬼としての一面のみを失い、神となったものは鬼の蓋を通り抜けることができる。鬼の蓋を通り抜けたものに対し

表1　賢瓶中に納入する五薬の順番

順番	生薬名	出典	本草書の記載	基源
1	牛黄	神農本草経	邪を除き、鬼を逐う。	ウシ科のウシの胆石
2	石菖蒲	薬性論	鬼の気を下す。	サトイモ科のセキショウの根茎
3	天麻	神農本草経	鬼精の物を殺す。	ラン科のオニノヤガラの根茎
4	人参	神農本草経	鬼の蓋。	ウコギ科のオタネニンジンの根
5	茯苓	神農本草経 名医別録	魂を安んじ、神を養う。 神を保ち、中を守る。 茯神。魂魄を安んじる。	サルノコシカケ科のマツホドの菌核

ては、さらに、五番目として茯苓を用いて、「魂を安んじ、神を養う。また神を保ち、中を守る。茯神となり、魂魄を安んじる」ことを行なった。以上のように本草書の記載内容から、納入する順番が存在していたと考えられる。

次に鬼は五薬によって鬼としての一面を失い、神となって賢瓶の外に出ることができた時には、四方には五色の玉と五穀粥があり、五色の玉を目印に移動して、五穀粥を食べることができる。これらの一連の行動は、その土地での平安堅固を願うと共に、鬼精の物だけが殺された鬼は、神となり新たに建造される建物の柱を支えていく役目を担うことになる。いわば縁の下の力持ちとなり、建物を支え続けたのではないだろうか。

漢方の世界では鬼を殺してはいけないという。私たちが現在でも使用する「鬼」のついた言葉として、「鬼は外」、「鬼退治」などがあるが、決して鬼を殺してはいないことに気づく。

現在でも、賢瓶と同様に、五色の糸が使用されているものとして、民族薬物資料館には、チベット医学で使用される丸剤がある（写真1）。チベット医学では丸剤を用いることが多く、僧侶が一つ一つお祈りを済ませている。特に高価なお薬は、絹で包まれており、五色の糸で口が縛ってある。古来、お薬とは大変貴重なものであり、お薬は身につけていることによる安心感があると同時に、身につけているとお薬から香りのようなものが出てきて、身体を守っているものと考えられる。そのためお薬をのむことを「服用」という。

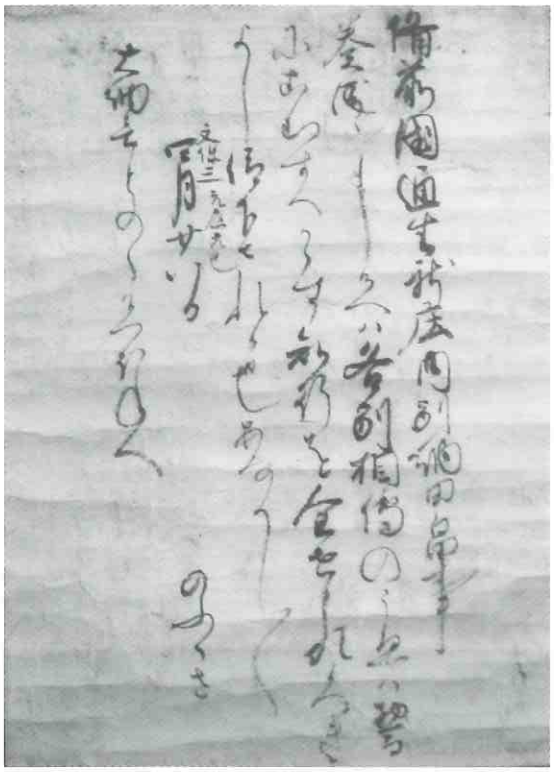
写真1　絹で包まれ、五色の糸で口を縛ってあるチベット薬物

五薬の各生薬の入手先を考えた場合、当時いずれの生薬も入手が困難であったことが予想される。特に人参は、朝鮮半島から中国大陸にかけての地域でのみ自生していたため、これらを輸入したものを使用したか、または日本の各地で自生している同属植物のトチバニンジンを使用したのではないかと推察される。その他の四種の生薬は日本国内で入手が可能である。賢瓶中に鱗片葉の見つかったオニノヤガラは、高山帯に生育し、野生品は地上部が出てくる夏の時期に採集する必要がある。今回見つかった鱗片葉は、地上部の一部である。そのため当時、自生していたオニノヤガラの地上部が出てきた夏の時期に採集し、使用したものと思われる。

高野山の文書（六）

宝寿院所蔵「万里小路宣房書状」について

［釈文］
備前国通生新庄内別納田畑事
奏聞申し候へは各別相伝のうゑは惣
而にこらすべからす知行を全せられ
候へきよし仰下され候也　あなかし
く
　文保三　元應元也
　四月廿八日　のふゝさ
大納言とのゝおつほねへ


万里小路宣房書状

本文書は高野山の宝寿院に伝わる文書で、通生新庄の別納田畠の知行を安堵したものです。差出人は「のふゝさ」、宛て先は「大納言とのゝおつほね」となっています。鎌倉時代後期、文保三年／元応元年（一三一九）四月二十八日に発給された文書です。その内容は、「通生新庄別納田畠に関して天皇に奏上したところ、特に代々相伝してきたものなので、他者の知行にせず、知行を全うするように仰せになりました。」というものです。「別納田畠」とありますが、別納の土地では、本来の領有者とは別個にその土地に年貢を賦課し、その年貢の一部を取得する権利がありました。

通生庄は、現在の岡山県倉敷市児島通生に位置し古くから港町として栄えていました。中世には庄園として成立し、鎌倉時代の日記には、本庄と新庄が見られます。南北朝時代には、本庄は公家の西園寺公重に安堵されています。新庄は京都大覚寺領となっていましたが、支配権をめぐって争いが絶えなかったようです。

「のふゝさ」は万里小路宣房（一二五八～一三四八？）と考えられ、後醍醐天皇の信頼厚い賢臣として有名で、後世には北畠親房、吉田定房とともに「後の三房」と呼ばれました。「大納言とのゝおつほね」の大納言は、『公卿補任』（神武天皇から明治元年までの公卿の職員記録）から花山院師信（一二七五～一三二一）と考えられ、そのお局、すなわち女官に宛てた文書となります。

さて、その内容からは、高野山や宝寿院とは関わりのない文書と思われます。では、なぜ宝寿院の所有になったのでしょうか。本文書の収められている箱内の貼紙銘によると、「万里小路宣房筆跡　並種子袈裟小野随心院内跡前大僧正栄厳御他界之後為御形見従当門跡賜之　無量寿院済算」とあり、小野の随心院の前大僧正栄厳の形見として、無量寿院に譲られたことがわかります。無量寿院は宝性院とともに、宝寿院の前身で、大正時代になって両院は合併し、今の宝寿院となりました。

本文書は、内容は高野山と関わりのあるものではありませんが、その来歴がよくわかる貴重な史料と言えます。

（研谷）

高野山霊宝館からのご案内

特別公開のお知らせ

○仏頭（高村光雲作）の公開

仏頭は、先般の「六波羅蜜」イベントにて、9月19日(土)から27日(日)まで特別公開を行ってきましたが、ご好評につき11月29日(日)まで公開期間を延長いたします。

この仏頭は、伽藍金堂の本尊薬師如来像、仏師高村光雲作の試作品です。

金堂の本尊秋季特別開帳が10月1日(木)から11月1日(日)まで執り行われますので、併せてご来場くださいますようご案内申し上げます。

金堂本尊薬師如来像（高村光雲作）

仏頭（高村光雲作）

○重要文化財・徳川家霊台内部を公開

〈日時〉　10月31日(土)～11月8日(日)
　　午前9時～午後4時30分
〈場所〉　徳川家霊台（家康霊屋・秀忠霊屋）
〈拝観料〉　200円（通常拝観料）
※但し、内部には入れません。

昨年の公開の様子

徳川家霊台内部の壁画

特別公開　報告

◎国宝・不動堂を公開

不動堂の建物内部は通常、非公開ですが、高野山開創千二百年を記念し、本年8月28日(金)から30日(日)にかけての3日間、特別公開を執り行いました。

公開期間中、6、406名もの見学者が来場し、普段見ることのない建物内部の見学を通じ、しばし鎌倉時代のタイムトリップを楽しんでいただきました。

不動堂公開の様子

お問い合せ先　高野山霊宝館　TEL 0736―56―2029(代)

霊宝館の庭園

サカキ・榊・栄樹・賢木

元高野山高等学校長　亀岡　弘昭

サカキはツバキ科・サカキ属の常緑小高木で、年を経ても大木・巨樹となる樹ではありません。梅雨の頃五弁の小さな白花をつけ、雨にうたれたりして黄色を帯び落花します。

秋には球形の液果が紫黒色に熟します。この汁液を白い紙や布に摺り込むと紫紅色に染まります。小鳥が好んで食べ排泄した小さな粒状の種子が発芽し成長します。

葉枝と液果

葉は革質で、特に表面は深緑色で光沢があります。枝に比較的、疎に互生し、端正清浄な風情があり、幹枝、葉ともに香気は無いといえるほどです。

この樹は「古事記」、「日本書記」にも神・神事との係わりによってあらわれ、「万葉集」に一首、時代をへて「新古今集」には四首、神や神事とともに詠みこまれています。

現在は神社には植えられていることが多く、神の依代、神前の供花、玉串、祓い（おはらえ）、神楽などに用いられ、民間では神前・神棚の供花、年中行事の神事、祭事などに使われています。

そのようなことから、現在ではサカキには榊の国字があてられていますが、古くは、佐加岐、坂樹、栄樹、賢木、真賢木などの字が。別称や方言名には本榊、花榊、かみしば（神柴）、かみば（神葉）などがあるそうです。

葉枝と幹

サカキという和名の命名由来には「栄え木」、神域の境界を示す「境木」などという説があります。

高野山塊では全域で自生樹も散見できますが、壇上伽藍の御社（明神社）をはじめ、山上各所で町内会や講員によって祀られている弁財（才）天、山の神明神、稲荷明神、丹生明神、影向明神、鬼子母神、愛宕権現などの社には、大抵、植えられ、供花にもサカキが。それらのうちで蓮花谷の稲荷明神社は五十余の朱塗りの鳥居をくぐって登った所に静やかに祀られ、外国からの参詣観光者の人気スポットともなりつつあるようです。拝殿の手前右側に七本のサカキが植えられ、その一本の枝に「手折って、お供えください」という意味の札が懸けられています。

高野山独特の用法では、毎年、旧暦九月三日の「堅精明神奉送迎」という厳儀において、席順にしたがい二人の、ご住職が明神様を自坊に迎えられ、一年間、この樹の葉枝を絶やすことなく供花として、お祀りされます。

『霊宝館だより』第一一五号文中の「到道博物館」を「致道博物館」と訂正させていただきます。